

## 特集 南スマトラ

### はじめに

本特集は1978年9月から1979年2月にかけて、京都大学東南アジア研究センターのスタッフを中心として行われたインドネシア・南スマトラ州における学際的調査の報告である。<sup>1)</sup> この調査においては、スマトラ島を貫く脊梁山脈の南端に源を発し、南スマトラ州を南から北へ流れてパレンバン下流でムシ川に注ぐコムリン川と、この合流点から下流のムシ川流域を主要な調査対象としつつ、必要に応じてコムリン川に並行して流れるムシ川の他の支流オガン川の流域および他の地域から情報を収集した。この地域を選んだのは、それがスマトラ島の一つの典型的な断面を提供すると考えられたからである。この断面に沿った地形の変化に応じてさまざまな生態的条件が見出され、人間はそれらの各々でさまざまな農業的適応を試みつつ集落形成をくり返してきたのである。

1) 本調査は文部省昭和53年度科学研究費(海外)「熱帯多雨気候下におけるイスラーム稲作社会の展開過程」(研究代表者坪内良博)によって行われたものであり、日本側からの調査参加者は次のごとくである。坪内良博・三谷恭之・高谷好一・古川久雄・海田能宏・山田勇・福井捷朗(以上、京都大学東南アジア研究センター)、北村貞太郎(京都大学農学部)、口羽益生(竜谷大学文学部)。インドネシア側からはスリビジャヤ大学学長シャフラン・シャムスディン氏、前農学部長ナスルディン・イリアス氏、現農学部長ラシッド・ハナフィア氏をはじめ、農学部および経済学部を中心とする多くのスタッフや学生の協力を得、ジャカルタからはヨンカー・タンバ氏(LEKNAS 研究員)、ブディサントソ氏(インドネシア大学文学部)、ウジュンパンダンからはマトウラダ氏(ハサヌディン大学文学部)などの参加・協力を得た。また政府機関としては、公共事業省都市および地方計画局、公共事業省湿地開発部、パレンバン森林局などの係員現地派遣を含む協力を得ることができた。記して謝意を表する次第である。

本特集はこの種の学際的研究における学問的性格の相違と目標の違いを明確にするために報告内容を2部構成とした。第I部は対象地域に存在する事実の把握を主目的とする純科学的思考法を前提として過去ないし現在にその焦点をあてているのに対し、第II部は規範的思考法を前提として、現在の事実から出発し将来の展望を主目的としている。

第I部の冒頭の「南スマトラの自然環境区分」において海田能宏は東南アジア島嶼部の一角としてのスマトラを、岩盤の上にピートがのっている「木の世界」として、川に支配される「稲作の世界」である大陸部と対比的に捉え、スマトラの地形を山の領域、丘の領域、川の領域、海の領域に大別し、調査地域を、山地(火山および高峰、解析山地、陥没地帯)、丘陵(解析丘陵、高位段丘)、準平原(準平原、中位段丘)、氾濫原(自然堤防、後背湿地)、閉塞低地、海岸平野(自然堤防、低位段丘、河口沖積地)に分類する。古川久雄はこのように分類された地形の中でもとくにスマトラの特徴を明瞭に示す低地部に注目して、その特徴を形成する泥炭・垂泥炭土壌の分布をさぐり、ポドゾル化の様態を論じ、さらに火山性噴出物の影響を吟味し、こうした特徴を捉えた上でコムリン川流域の土壌地域を提示する。山田勇と Sukristijono Soekardjo は「木の世界」であるスマトラの原形を構成すべき森林の生態学的調査を行なった。彼らの調査は海岸から山地までの各種の森林植生を扱っているが、本特集ではスマトラがカリマンタンと並んで東南アジアにおける豊富な湿地林の残存で知られていることに留意して、

マングローブ林、湿地林の植生の記述に主力を注ぎ、同時にこれらの湿地林の開拓の様相についても論じる。

高谷好一は上述の自然条件の下で行われてきた農耕の諸形態に関する詳細な観察を提示する。「木の世界」の稲作は焼畑的な色彩でおおわれており、パラ(なた)と植え棒に頼る焼畑的手法が低湿地に至るまで適用されているとみられる。低湿地で特徴的に見出される伝統的な手法は、ルバックとよばれる氾濫原ないし閉塞低地における減水期稲作、およびブギス人によってもたらされた海岸平野におけるパサンスロットとよばれる潮汐を利用する自然堤防上の稲作である。

三谷恭之はこの地域に分布する言語集団の様相を明らかにすることを試みる。脊梁山脈上のラナウ湖からコムリン川中流にかけてはラナウ、ダヤ、コムリンなどのランボン系諸言語が分布し、ムシ川流域、オガン川流域およびラナウ湖に北接した脊梁山脈中にはマレー語系の諸方言が分布する。これらの言語がランボン系、マレー系それぞれの中では微妙な差異を示しつつ連続的に変化している様子を考察する。坪内良博はこれらの民族がいかに自らの集落を形成してきたかを、調査集落に残された口碑をたどりつつ叙述する。しばしば共通の祖先をもつ集団とみなされる血縁＝地縁集団の結束は固く、新集落形成は分村形成を原則とするのが特徴である。そうした人口増加と集落発展にともなって低地の土地利用が進むようになる。従来の土地利用の間隙をぬってジャワ人・ブギス人などの進出もみられる。

第Ⅱ部では北村貞太郎、海田能宏がそれぞれの専門的立場から南スマトラの将来像の考え方を述べる。まず北村は地域計画学および農業地理学的立場から行政村に相当するマル

が単位のデータを収集・処理し、対象地域内の圏域の構造を明らかにしつつ、地域の一体的把握を試み圏域別の特性把握を試みる。次いで海田は南スマトラの農業開発の可能性を各地域区分ごとに論ずる。その中で、海田は西欧人の計画専門家の論調が準平原でのゴム園造成と穀作を推奨するのに対して、農民個人が十分な労働と時間を費やせば自由で多彩な土地利用を展開できる低湿地をより重視すべきだという見解を披露する。そして、最後に、北村、海田はこうした圏域別地域特性、開発可能性を踏まえ、地域開発の将来のとり組み方につき述べる。中でも、交通計画と農業開発(含水利計画)の組み合わせ方の重要性に論及する。

以上がこの特集の構成である。全体を流れるトーンにいくらかでも共通のものがみられるとすれば、それは調査参加者が赤道に近い太陽に身をさらしつつ、ジープや小舟で行動をともにしながら激論をたたかわした結果にほかならない。われわれの調査は完全な成果を得るには余りにも短期間であったが、学際的なチーム編成は「ことがら」の本質的理解への到達において時間的制約という難点をかかなり克服できたと思う。民族誌が不備であり、かつ地域の変異が大きい調査地に対してはかかるチーム編成の調査はきわめて有効であったと思う。

最後になるが、この調査が可能となったのは南スマトラ州の地元の大学であるスリビジャヤ大学の協力に負うところが大きい。この特集に続いて同大学との共同報告の形式をとる英文報告書を刊行する予定であるが、本特集はその骨子となる報告を集めたものである。(坪内良博\*)

\* 京都大学東南アジア研究センター

## Introduction

This special issue consists of the reports of the interdisciplinary research conducted by a Kyoto-Sriwijaya Universities team in the Komering-Ogan-Musi valleys of South Sumatra from September 1978 to February 1979 to investigate population growth and land use in this area. The area was chosen as it offers a typical profile with various ecological conditions for agricultural and human adaptation. The reports are divided into two parts: Part 1 is descriptive, and Part 2 offers a future perspective through normative analysis.

The articles in Part 1 are as follows: In the first article Dr. Yoshihiro Kaida gives a classification of the region. He describes the island of Sumatra as a world of trees growing on peat, which overlies rock. He then divides Sumatra into four major spheres which are dominated by either mountains, hills, rivers, or the sea. Those four spheres are further divided into (1) Mountain (Volcano and High peak, Dissected mountain, and Depression), (2) Hill (Dissected hill and High terrace), (3) Peneplain (Undulating peneplain and Middle terrace), (4) Floodplain (Natural levee and Backswamp), (5) Constricted River Basin or *Lebak*, and (6) Coastal Plain (Natural levee, Low terrace, and Estuary), as shown on the map.

Dr. Hisao Furukawa, soil scientist, turned his attention to the lowland area of South Sumatra, and shows the distribution of the peaty soils which characterize the area. After discussing podzolization, the effects of volcanic eruptions, and other

factors, he presents a soil-classification map of the research area.

Drs. Isamu Yamada, forest ecologist, and Sukristijono Soekardjo made an ecological study of the forest. Though their survey covered forest vegetation from sea-shore to mountain top, they concentrate their description in this report on the mangrove and swamp forests of the lowland area because of their importance in Sumatra. They also describe the native method of opening the swamp forests.

Dr. Yoshikazu Takaya, natural geographer, presents his observations on the agricultural practices of this area. The influence of slash and burn cultivation with *parang* (long bush-knife) and planting stick dominates even the rice cultivation of the lowland area. Particular aspects of lowland rice cultivation are the utilization of *lebak* in the dry season and tidal irrigation or *pasang surut* in the downstream area.

Dr. Yasuyuki Mitani classifies the languages and dialects spoken in this area. Lampung and Malay are the major languages. The former includes the Ranau, Daya, and Komering languages and is distributed mainly in the Ranau district and the upper and middle Komering Valley. Dialects of Malay are spoken in other areas including the Musi and Ogan valleys and the mountains adjacent to Ranau.

Dr. Yoshihiro Tsubouchi, sociologist, describes the settlement of the surveyed area utilizing local legends and oral traditions. New villages were formed in principle by

establishing a branch hamlet firmly tied through kin-relations. Development of the lower areas proceeded in accordance with population growth. Recent transmigration of Javanese and Buginese is also important for their intensive use of land scarcely utilized or abandoned by the local people.

In Part 2, a future picture of South Sumatra is drawn by Mr. Teitaro Kitamura and Dr. Kaida. Mr. Kitamura, regional planning specialist, makes a regional classification utilizing the information in Part 1 and analyzing the data obtained from each *marga*. He then tries to predict the future prospects of each region. Dr. Kaida, as an irrigation specialist, examines the possible agricultural development of the different regions. In contrast with Western ideas which prefer to concentrate their developmental effort on the peneplain, he concen-

trates on the wet lowland where many types of land use are possible through the efforts of individuals.

Though the research period in South Sumatra was too short to obtain a complete and satisfactory result, the interdisciplinary team does present a whole picture of the area. This type of research seems effective in areas where ethnographic monographs are scarce and the regional variation is remarkable.

Finally it should be mentioned that the research would not have been possible without the cooperation of the local staff of Sriwijaya University. The editor hopes that the reader will also refer to the English report of this research which will soon be published. (Yoshihiro Tsubouchi\*)

---

\* The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University